鹿児島県知事賞

雨にぬれたえがお

鹿児島市立喜入小学校　二年

小窪　蒼士

ゴールデンウィークに、かぞくでJリーグのし合を見に行きました。ぼくは、サッカーが大すきなので、前の日からわくわくしていました。でも、この日は雨がふったりやんだりするいやな天気でした。しかも、ちゅう車じょうが空いていなくて、とおくから歩くことになりました。だから、スタジアムについたときにはつかれていました。

雨の日は、かっぱをきておうえんします。かさをさすと、うしろでおうえんしている人が見えないからです。

ぼくは、早くすわりたいし、雨にぬれるのもいやで、いそいでかっぱをきたいと思っていました。それなのに、かっぱがからまってうでが出せません。「し合がはじまっちゃう。」と思うと、ますますうまくきることができずにいらいらしてきました。お母さんにたすけてもらおうと思ったら、ぐずってないているおとうとのおせわで大へんそうです。

「かしてごらん。」

うしろから、きゅうに手がのびてきました。知らないおばちゃんが、かっぱのそでをひっぱってくれたのです。よこにいた妹にも、かっぱをきせてくれました。それだけではありません。

「おしりがぬれちゃうから、ちょっとまってね。」

と言って、雨でぬれたいすを自分のタオルでふいてくれました。たのんでいないのに、ささっといろいろなことをしてくれるので、ぼくはびっくりしていました。

「ありがとうございます。」

し合がはじまったので、おれいを言ってすわりました。

休けい中に後ろを見ると、さっきのおばちゃんと目が合いました。ぼくは、にこっとわらってくれたおばちゃんのかおを見て、はっとしました。雨でぬれていたからです。ぼくは、雨がかかるたびにタオルでふいていたけれど、おばちゃんはふけないのかもしれない。ぼくのいすをふいたから、タオルがびちょびちょなんだ。そう思うと、ごめんなさいの気もちとおばちゃんのやさしさが、さらに大きくかんじ、心がざわざわしました。「どうしよう。おばちゃんにタオルをわたしてあげたいな。こえをかけようかな。でも、はずかしいな。」ぼくがまよっている間に、時間がすぎていきました。

この日のサッカーは、せん手のかっこいいプレーよりも、おばちゃんのにこにこのえがおが、一ばんの思い出です。

ぼくは、こまっている人に出会ったらたすけてあげられるかな。知らんぷりしてしまうかもしれないし、うまくできないかもしれない。でも、おばちゃんのやさしいえがおを思い出すとゆう気を出せると思います。これからは、こまっている人にこえをかけてみたいと思います。たすけてもらうと、どんな気もちになるか、ぼくは知っているからです。

［審査評］

おばちゃんのやさしさに気付いた時の揺れ動く心の様子が上手に表現されています。また、おばちゃんの笑顔が何よりの思い出であることから蒼士さんにとって忘れられない出来事であったことが伝わってきます。きっとこれから困っている人を助けるのだろうと、読む人にそう期待させる素敵な作文です。